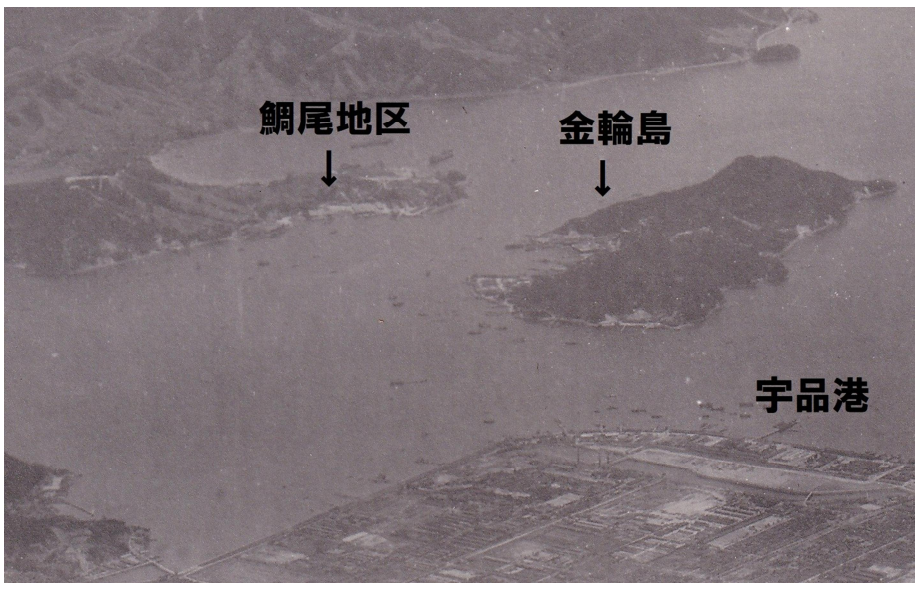
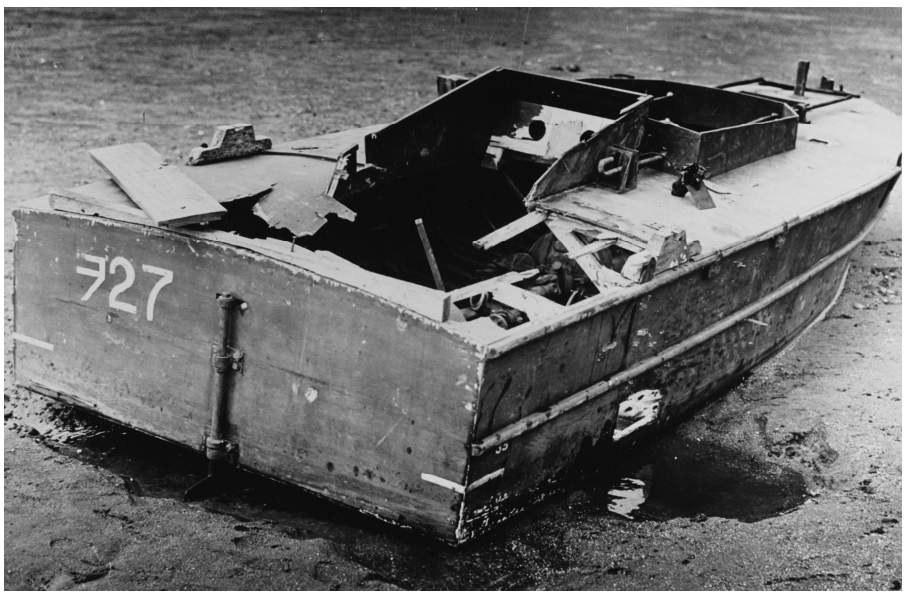
4. 陸軍船舶司令部配属



数金さんの主な勤務場所、鯛尾（たいび）、金輪（かなわ）島、宇品港の位置関係。
個人蔵　広島市郷土資料館 画像提供



米軍に捕獲され海上を疾走するマルレ艇
正式名称は四式肉薄攻撃艇といいます。全長5.6m、幅1.8m、時速40km強の本艇はベニア製。出撃時は右上写真に見える後部の斜めの台にドラム缶形の爆雷を搭載しました。
アメリカ国立公文書館　蔵



破壊されたマルレ艇
破壊面から本艇が薄いベニア板で製造されていることが判ります。敵艦に近接して爆雷を投下、離脱する設計でしたが、実際は特攻と変わらない戦法でした。
アメリカ海軍歴史遺産司令部　蔵

その後、数金さんは「暁(あかつき)部隊」の通称で知られる広島の陸軍船舶司令部に配属されました。本部の宇品港周辺は陸軍船舶部隊のメッカとして全国から兵が集まっており、方言の強い兵との会話に困ったそうですが、相手からも「お前の言葉がわからない」と言われたそうです。ほぼ標準語の勝浦の言葉でも、出身地によっては聞き取れない兵もいたものと思われます。

数金さんの仕事は、広島市南対岸の陸軍金輪島工場で、四式肉薄攻撃艇(マルレ艇)に自動車用エンジンを載せる作業でした。マルレ艇は現在の競艇のように前2/3が浮くほど速かったそうですが、それを知らず便乗した兵の中には、艇の後ろに腰かけ、速力を上げた瞬間にコロリと転落する者も。また、嵐で艇が牡蠣の養殖筏に乗り上げ難儀したこともありました。その他では防空壕堀りもあり、一人は耳掻きみたいな長い鉄棒を水平に担ぎ、もう一人がハンマーで鉄棒を打つことで細長い穴を穿ちますが、鉄棒を少しずつ回しながら掘るのがコツとのこと。ある程度の深さになると、その小穴から石屑を掻き出しダイナマイトで発破をかけますが、御影石のような岩が飛び散るため十分に退避する必要が有ったそうです。

ある朝、宿舎のある本州側の鯛尾地区の波止場から渡し船で金輪島へ向かうと、５００メートルはある海峡の真ん中で船のエンジンが故障し立ち往生する事態が発生しました。しかも、操縦兵が修理に必要なスパナを忘れた上に、２０人ほど乗っていた兵隊の多くは陸者(おかもの)で泳げない人ばかりだったので、漁師出身の数金さんは「自分が取ってきます」といって海に飛び込んで波止場に向かい、スパナを受け取ると紐で首にかけ再び泳ぎ戻り、無事修理を行うことができました。帰隊後、お礼にということで夕食の配膳をいつもより多くしてくれたため、日々空腹の班員と分け合って喜んだそうです。 軍隊の食事は、主にご飯と、副菜として野菜や肉のごった煮のことが多く、将校は兵士とは食事が別で肉類が多かったそうです。 このころ、数金さんは２等兵から１等兵に進級していました。